朝日新聞

あの人とこんな話

「思い」が人生を引っ張る。無茶と言われてもやろうよ

(株)水谷事務所代表／NPO法人メリープロジェクト主宰／アートディレクター

水谷 孝次さん

みずたに・こうじ ●1951年愛知県生まれ。日本デザインセンターを経て、83年水谷事務所設立。東京ADC賞、JAGDA新人賞、ニューヨークADC国際展・金賞、ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ・金賞・特別賞など数々の賞を受賞。99年から「メリープロジェクト」を開始。2005年愛知万博にて「MERRY EXPO」を展開。08年北京五輪開会式のオープニングセレモニーに芸術顧問として参加し、笑顔を提供。著書に『デザインが奇跡を起こす』(PHP研究所)がある。水谷事務所HP(http://www.mizutanistudio.com)、メリープロジェクトHP(http://www.merryproject.com)。

北京五輪の開会式のラスト、スタジアムを取り囲む大型スクリーンに子どもたちの笑顔が映し出された。そして会場では笑顔がプリントされた2008本の傘が次々と開かれる。明るさに満ちたこの情景を覚えている人も多いだろう。登場した五大陸すべての子どもたちの笑顔は、いかにも五輪にふさわしかった。その写真を自ら撮影し、そして芸術顧問を務めたのが水谷さんである。

アートディレクターとして、広告業界では広く知られている。世界のポスター展の賞という賞も手にしている。けれど、この笑顔の写真は、その仕事の延長線上にあったわけではない。

「僕はずっとグラフィックデザインという仕事を夢中でやってきました。人に何かを伝えることが何よりも面白かったからです。時代の追い風もあった。仕事の規模はどんどん大きくなり、話題にもなり、預金通帳の残高は増え続ける(笑)。外から見たら希望をかなえた男に見えたでしょうね。

でも自分では違和感があった。ベルリンの壁が壊れた頃です。世の中が何かを求めて変わろうとしていると感じていたんですね。そして数年後には阪神・淡路大震災が起きた。僕はただ商業主義の世界で働いていていいのか、と立ち止まってしまった」

パタリと広告の仕事をしなくなる。デザインで社会に役立つことはできないのか。悩み続ける水谷さんの目を開いたのは、机の引き出しから出てきた少女の笑顔の写真だったそうだ。

「元気が出たんですね。これなら他の人だって幸せな気持ちになるに違いない」

デザインという表現力で世界に笑顔を伝えられる。周囲は、何を今さらと冷ややかだったが、水谷さんは晴れやかな気持ちだった。やがて笑顔撮影のために世界を旅する。出会ったのは素晴らしい笑顔たちだった。

北京五輪のセレモニーも、自ら企画を提案し粘って思いを貫いた。「心の声に正直に人の役に立とう、今のあなたの仕事で」。水谷さんは優しい時代を目指す。